



日 口 交 流

発行 : 特定非営利活動法人 日口交流協会
E-mail:nichiro@nichiro.org
Home Page http://www.nichiro.org
〒106-0041 東京都港区麻布台3-4-14 麻布台マンション401号
Tel : 03 (5563) 0626 Fax : 03 (5563) 0752



日口地域交流年「新春日口交流のつどい・2020」開催

服部 文男

第3回となる「新春日口交流のつどい・2020」は1月29日(水)に在日ロシア連邦大使館において開催しました。主催は日口交流協会、日本・ロシア協会、日本対外文化協会の3団体の共催で、後援に在日ロシア連邦大使館及びロシア連邦文化科学交流庁となっています。

参加者は3団体協力のもとに約270名の各団体の会員やご家族、友人等の皆様に多数ご参加いただきました。

開催は午後6時から、第1部としてロシア大使館付属学校合唱団の「ロシアンカ」によるロシア民謡、日本の童謡などの合唱とフォークロアダンスを加えての民族衣装での素晴らしいコンサートでした。「ロシアンカ」は7歳～15歳の少女少女合唱団で1992年に結成され、日本でもよく知られているロシア民謡などの音楽で、日頃ロシア文化を紹介している素晴らしい生徒さんたちです。「日口交流のつどい」に出席された皆さんの一番人気は「ロシアンカ」のようです。

第2部はパーティーを開宴し、司会は当協会岩本常任理事が担当、開会挨拶は実行委員会委員長の土屋日本・ロシア協会副会長が行いました。主催団体挨拶は、今年の実行委員会幹事となっている日本・ロシア協会の高村正彦会長、続いて有馬朗人当協会会長が挨拶をされました。来賓挨拶には、在日ロシア連邦大使館特命全権大使のミハイル・ガルージン様及び元内閣総理大臣の鳩山由紀夫様からいただきました。

恒例の鏡開きは、ロシア大使ご夫妻、有馬会長、高村会長、イーゴリ・チトフ参事官、渡邊日本対外文化協会専務理事の6名で執り行われました。そして、乾杯は渡邊専務理事のご発声により祝宴に入りました。

広間の中央にセッティングされたテーブルから、ピロシキなど多くのロシア料理を味わいながら、楽しい歓談や賀詞交換で会場は正に日口交流の場として盛会となりました。当協会会員の中には大阪、長野、静岡などの遠方から、また、来日中のエカテリンブルグ情報文化センター「日本」のガ



リーナさんとワレンチンさんも参加いただきました。

大広間前のホールでは、ロシア大使館の皆さんの作品展「いけばな」(当協会山岸常任理事指導)と「手描き友禅」(笠原会員指導)を開催し、観賞いた

きました。午後8時過ぎには閉会の挨拶を服部文男副会長が述べ、無事にお開きとなりました。

今回の開催にあたり、在日ロシア連邦大使館のミハイル・ガルージン大使、ユーリ・サプリン参事官のご理解と多大なるご協力に対し、心より厚く御礼申し上げます。また、主催団体実行委員会委員等の皆様のご協力に対し、合わせてお礼申し上げます。(副会長)



大使館の皆さんの作品

お願い

NPO 日口交流協会では、ロシアでの日本の伝統文化などの紹介、国内でのロシア関連の学習会、ロシア人とのイベント交流など幅広い活動を続けています。これらの活動を一層推進させるために皆様からのご寄付をお願い申し上げます。一口千円からいくらでも結構です。

振込先：郵便口座 00160-9-66486、加入者：日口交流協会
連絡先：日口交流協会事務局 E-Mail : nichiro@nichiro.org
Tel:03-5563-0626 Fax:03-5563-0752

お知らせ

●ロシア語クラス生徒募集中

ゼロからクラス (毎日曜) 14:00～15:30
初級クラス (毎水曜) 18:00～19:30
準中級クラス (毎月曜) 18:00～19:30
中級クラス (毎火曜) 18:30～20:00
上級クラス (毎土曜) 10:00～11:30
翻訳クラス (土曜月2回) 13:30～16:00
月4回クラスは5500円×3ヶ月前納、原則、会員のみ。
*経験豊富なロシア人の先生方が担当しています。(翻訳クラスのみ日本人)
*休講になる場合もございますので、見学の方は事務局にお申し出ください。テーマ別ロシア語について、ご希望のテーマがありましたらいつでもご提案ください。

●第67回マトリョーシカ絵付け教室

日時：2020年2月16日(日) 13:30～16:30
講師：菅野エレナ
場所：田町「リーブラ」2階造形表現室
会費：3,000円 (5個セットの教材、講師代、お茶代含む)
●テーマ別ロシア語「続ロシア語でおもてなし」
日時：2020年2月22日(土)、3月1日(日)、3月8日(日)、
3月14日(土) 13:30～16:30
場所：田町駅みなとパーク芝浦「リーブラ」2階
費用：会員10,000円、一般12,000円 (4回12時間)
*お問い合わせ、お申し込みは協会事務局まで
Tel : 03-5563-0626 Fax:03-5563-0752
E-Mail:nichiro@nichiro.org

● 広報部宛、ご投稿、ご意見をお待ちしております



2019年エカテリンブルグ日露青年交流プログラムを終えて

池谷 嘉将

12月23日から27日までの間、私たちはロシア側の参加者と一緒にビデオ制作プロジェクトに取り組んだ。今回のお題は、日露どちらにも有益になる情報を映像媒体に収め、20分以内の動画として完成させるという内容であった。私たちは13人のグループメンバーで、どのようなビデオを作りたいか案を出し合った。話し合いの結果、TVのニュース番組を模倣しスポーツや音楽、料理などいくつかの категорияで日露両面から何か一つずつ紹介をする。それらを編集し、ニュース番組のコーナーに見立ててビデオを作るという事になった。方向性が決まり、雰囲気は非常に良かった。やる気に満ち溢れた私たちは、全員で手を合わせ一斉に空に向かって手をあげた。ここで一日目は終了した。

二日目からはビデオ撮影に取り組み始めた。まずはブリヌイというロシア料理作り。ブリヌイは各家庭によって作り方は異なるため、いくつかの種類を試した。日本人に好評だったのはケフィールより牛乳をベースにした生地であった。撮影後、私もブリヌイ焼きに挑戦してみたが、失敗し焦げてしまった。しかし「誰でも最初のブリヌイは失敗するから大丈夫。これは全ての事に関して言えることで、例え初めて挑戦したことが上手くいかなくても気にしなくてもいいのよ」と、サーシャから思わぬアドバイスもいただいた。

日本側からも、おにぎりや茶道の作法なども紹介した。ロシア人のルスランが抹茶を飲もうとした際、熱いあまり咳込み、周囲が笑ってしまい愉快的なNGが出来たのはいい思い出である。こうして、次々と動画を撮影していった。何よりよかったのが、誰一人手が余ることがなかったことである。映像に映らない裏方メンバーも、編集係、撮影係などを担ってくれた上、日本人参加者のみんなもそれぞれ輝くシーンがあった(茶道、長唄、おにぎり、ラジオ体操等)。私の役目は、現地



リポーターとして全てのコーナーにインタビューとして顔を覗かせる仕事である。全員の仲が深まり、一丸となったところでビデオは無事完成し、最終日にみんなで見る事が出来た。

今回のプロジェクトは、ビデオ完成までの過程がかけがえの無い思い出となり、経験にもなった。ロシア人と日本人が協

力して共通の目標に向かっていく経験は今までなかったからである。これは将来の日露を繋ぐ仕事にも役立つと思う。来年度からは、学生ではなく社会人として、今回の経験を存分に生かしていきたい。(法政大学国際文化学部4年)

露日協会エカテリンブルグ支部、ロシア地方愛国教育センター、情報文化センター「日本」、YMCA ウラル、日口交流協会の共同開催による日口青年交流プログラムが12月に行われた。暖冬とはいえ、期間中の気温はマイナス10～12度ぐらい。街は雪に覆われ新年を祝う氷像も立っていた。学生達はこの育成プログラムで両国の文化を研究し最終日に成果を発表。方法は与えられるのではなく考える。言葉の壁を乗り越えてプロジェクトを完成させなくてはならない。発表に向けた準備を進めつつ、史跡や美術館の見学・工芸やペリメニ作りのワークショップ・スポーツも盛り込まれていた。日本人学生は十分にロシアの文化に触れることができたと思う。

本プログラムはロシア側の各団体の連携により大変充実した内容で、さらにホストファミリーの協力は大きかった。短い期間であったが私達は家族になり一日の出来事や困ったことを話し合い、気持ちを落ち着けることが出来た。部屋の提供のみならず参加者の支えとなっていた。どの学生も積極的に交流し、それぞれみんな輝いていた。日露双方の学生が生活を共にした一週間が、今後何らかの糧となるよう願っている。(岩本)

モスクワ「ムセイ」巡り・その19

モスクワ鉄道博物館

大矢 温

前々回にこのコラムでリーシュスキー駅の鉄道博物館を紹介した。今回はパヴェレツキー駅の鉄道博物館。リーシュスキー駅の鉄道博物館が開放的な屋外展示だったのに対して、こちらは屋内展示だ。しかもどことなく権威主義的な雰囲気がただよう(理由は後述)。去年の秋に訪れた際も門番のおじさんに一番上までシャツのボタンを締めて「ちゃんとする」ことを要求された。

さて、その厳しい服装チェックの理由だが、そもそもこの博物館、2011年までは「レーニン中央博物館附属レーニン葬送列車館」と呼ばれていたことに起因する(と思われる)。ソ連時代はレーニンにまつわる「聖地」の一つだったわけ。おじさんの職業上の誇りを傷つけるわけにもいかないので、無礼を詫びて「同志レーニン」の葬送列車を拝見させていただいた次第。とはいえ、館内に入れば職員の人たちはみな親切に対応してくれたことも付記しておかねばならないだろう。あるいは厳格な対応はおじさんの個人的な趣味だったかもしれないが、その辺は不明。決しておじげづく必要はない。「聖



地」であるから大声を上げるのは論外だが、常識の範囲内で静かに見学すれば問題はないだろう。

肝心の博物館だが、館内に入ると正面に磨き上げられたレーニン葬送列車が展示されている。1924年1月23日にレーニンの遺体をモスクワに運んだV 127型機関車である。このほかのレーニンにまつわる展示も見ものだが、19世紀以来のロシアの鉄道に関する地図や鉄道部品の展示も興味深い。また、博物館の地下階は昔の客車や駅長室の様子がマネキンで再現されていたり、巨大なジオラマの中を模型の鉄道が走り回っていたりと楽しめる展示となっている。博物館自体はそんなに大きくなく、小一時間もあれば全部見て回れる。長距離列車の発着駅であるパヴェレツキー駅を利用する際にちょっと寄り道して見学するのがおすすめ。

入場料：大人150ルーブリ、休館日：月曜、火曜
最寄り駅：地下鉄パヴェレツカヤ

Павелецкая

(札幌大学地域共創学群教授)



《モスクワ・アラカルト57》

早稲田大学ICCロシア文化ナイトに参加して

日向寺 康雄

昨年12月6日(金)夕方、大隈ガーデンハウスで催された「ロシア文化ナイト～未知の大国ロシアはとって『おもロシア!』」で少し話をする機会を頂いた(主催:早稲田大学ICC[異文化交流センター]/協力:日口交流協会)。

同大学には現在125を超える国及び地域から約8千人の留学生が在籍しており、その数は日本一だそうだ。ICCは、そうした国際性豊かな環境を活かしつつキャンパスにおける異文化交流のさらなる充実を目指し、すべての学生達が国境・国籍・文化の枠を越え活発な相互交流を行う中で、互いの理解を深めながら新たな価値観や文化を生み出す事を目指している。その活動の最も素晴らしい点は、何といても学生達が主体となっていることだろう。今回のイベントで中心的役割を担った学生スタッフリーダーの中嶋さんや氷沢君は、ロシア旅行の経験があり、それも単なる観光ばかりでなく果敢にロシア人の懐に飛び込んで貴重な人間交流の体験を積んでいる。その時の新鮮な感動が、まだまだ日本人に知られていないロシアの魅力をまずは身近な学内の人達に伝えたいという気持ちを高め、今回のイベント開催の原動力になったという。

私が10月に打ち合わせでICCを訪れた時も、彼らは大学職員の南部氏を中心に、生きた情報発信と収集のスペースとして多くの留学生でごった返す早稲田キャンパス3号館1階のICCラウンジで、エネルギーに立ち働いていた。私はそこで、カザフスタンからの留学生と知り合ったが、彼の明る



い表情と前向きなオーラが忘れられない。旧ソ連圏からはウズベキスタンの留学生が多く、ロシア人は15人に満たないという。ICCが開設されてから13年半になるが、ロシアをテーマにしたイベントは久しぶりで、今回はほぼ8年ぶりだそうだ。年末にかけて同じ時期、トルコやオーストリアの文化ナイトも企画され、あちらは大使館や公的機関等からの応援も含め華やかな準備が続いていたようだったが、例によってロシアサイドのサポートは出足が鈍かった。

実は私自身、何人集まるか、当日会場に到着するまでひどく心配だったのだが、約130人の方々に来て下さり正直ホッとしました。これは日本とロシアの学生が「ありきたりの紹介イベント」に甘んじず、若い発想による、よく練られたプログラムを創り上げた事が大きい。特別ゲストもバラライカ奏者ではなく、シベリア南部トゥヴァ共和国の民族楽器奏者で喉歌(のどうた)の名手、寺田亮平氏が招かれた。また学生達の意気に感じて、ボルシチやピロシキの無料サービス、クワスの試飲を可能にした協賛企業の存在も大きかった。おかげで会場に和気あいあいとした交流ムードが自然に生まれた。そして最後は留学生の音頭で、参加者達と共に皆で舞台に集まり、モスクワ大学アジア・アフリカ諸国大学の学生達にビデオメッセージを送った。明日に期待が持てる、気持ちの良いイベントだった。写真はICC提供。

(元モスクワ放送チーフアナ・現中大・早大非常勤講師)

国際放送史研究の戯言No.005

ロシアの警察官

島田 顕

ロシアの警察官は街の中をうろつく市警と、自動車の往来を取り締まる交通警察(ガイー)に分けられる。

放送局に勤めていた頃のこと。テロが頻発し、取り締まりが厳しかったためか、たいてい前者の警察官たちは地下鉄駅の出入り口付近に屯し、外国人を見つけるやいなや、近づいてきて職務質問していた。彼らはまずパスポートを見せると要求する。パスポートの顔写真とビザの内容、特にレジストラツィヤという住所と滞在期間が明記して部分をチェックするのである。出勤途中の地下鉄駅の近くで呼び止められ、パスポートどころか財布の中身までチェックされ、ドル紙幣を数えられるという非常に不愉快な思いを味わったこともある。後になってわかったことだが、財布の中に麻薬の小袋を入れていないかどうかを確かめるためだったらしい。それにしても嫌がらせといってもいい取り調べだった。お金が取られるのではないかと本当に冷や冷やした。

警察官にパスポート提示を求められたとき、パスポートは持っていない、家においてきたと言ったら本当に大変なことになる。パスポート不携帯=不法滞在外国人と見なされ、警察署に連れていかれ、尋問を受け、調書が作成され、罰金を支払わなければならない。私自身罰金を払ったことはないが、一回だけ警察署に行ったことがある。宿舎近くのあまり人気のない通りの警察署の分署である。パン屋のキオスクにパンを買いに行ったときのこと。パスポートのうっかり不

携帯だった。ちょっとの間だから大丈夫だと思っていたら、こういうときに限って警察官に制止される。運が悪い。パスポートを持っていないことをとがめられ、宿舎においてしまったと説明した。ごめんなさい、うっかりだったと。宿舎はあのビルだからとってくるよといっても、その警察官は聞いてくれない。だったら一緒にいこう、パスポートを見せるからと私が言う。結局その若い警察官は「鼻薬」がほしかったようで、私にお金がないことを察知すると、後で警察署に来いと言って私を解放してくれた。出頭しないことをとがめられてはまずいので、急いで宿舎にパスポートを取りに行きすぐ近くの警察署の分署を訪ねた。そしたらびっくりした。ロシアの警察署の玄関ドアから入ったすぐわきには、鉄格子つきの牢屋があるのだ。その中には逮捕されたばかりの巨漢(泥酔していた模様)がいて、大声で悪態をついていた。そのような状況に面食らっていた私に気がついたある年配の口ひげを生やした警察官(平の警察官ではなく、私に職務質問した若い警察官の上役と思われる人)が、「何用か?」と私に尋ねてきたので、パスポート不携帯で若い警察官に職質された事情を説明し、パスポートを持参してきたと述べ、その警察官に見せた。そうしたらその年配の警察官は私のパスポートを調べた後、「ありがとう。君はハローシー・チェロヴェーク(善良な市民)だ。ありがとう」と言って、私にパスポートを返してくれた。わかってくれる良い警察官もいるんだなあと感じた次第である。

カザンに於いてソ連を回顧する

畔上 明

ロシアの地方都市には、必ずといってよいほどにその地方なりの郷土誌博物館が設置されています。更に、その都市ならではの博物館を目にする楽しさがあります。

昨年技能五輪国際大会開催に伴い三度に亘ってヴォルガの畔りのカザンを訪れた際に、ユネスコの世界文化遺産である「カザン・クレムリン」のみならず、「タタール文化と工芸」博物館や、「幻想博物館」「ゴーリキーとシャリアピン記念博物館」「トルストイ博物館」郊外の「全ての宗教の博物館」、世界遺産の島「スヴィヤシスク」等の他にレーニンが学んだ町である故か「ソヴィエトの生活博物館」「幸福な子供時代の博物館」といった二つのユニークな展示館を見付けました。

共に20世紀のソヴィエト社会主義国であった時代を示す姉妹博物館ということで、初老の婦人が（今年70歳を迎える私と同じくらいですが）こちらの年齢を聞き、「若く見えるけれど年金生活者料金の入場料で」と割引してくれ、二つ目の博物館では、「両方の入場者への特別料金」と更に割引をしてくれたのでした。

次から次への訪れるロシアの若者や中国や韓国からの観光客はどのような印象を持たれたことか興味のあるところでしたが、来訪者の切符を用意し不器用にお釣りを遣り繰りしながらその受付の婦人が合間をみては見学中の私のところへやって来て、年齢から来る親近感からか「ピオネールの子供たちの制服ですよ」とか「1980年モスクワ・オリンピックのマスコット小熊のミーシャ」とか「1969年から83年にかけて



ての人形アニメのチェブラーシカ」などと声を掛けてきました。

懐かしの玩具、勉強机、文房具、ポスター、電気製品、ミネラル・ウォーター販売機、レトロなゲーム機械、ソヴィエトという壮大な実験の中に健気に生きてきたロシアの人々にとっての辛くも甘酸っぱい記憶がしみこんだ時代に40回程訪ソの機会を持った私にとっても当時土産として購入し今やガラクタとなってしまった人形や絵本や文具、壁飾りといった類いも展示品として所狭しと並んでいます。ソ連崩壊前夜のペレストロイカの時代に至るまで、私にとってはそう簡単にあの体制が変わるものだろうかと思っていた、街角には「栄光なれ共産主義よ」といったスローガン、商店の看板は「修理」、「肉」、「本」、「菓」、「簡易食堂」など実にシンプルであって現在のロシアの街を見て回る限り想像が全くつかないくらい華やかな広告など無くイルミネーションも無く小気味よいくらいのもので断捨離の町といった光景が頭の中に再現されるのでした。歩道の片隅には重量計を置きお金を取って通りすがりの人の体重を測定する商売があった不思議な国、或いはヴァダーと表記された自動販売機で1カペイカ投入し受口に置かれた厚手のガラスコップを下に向け噴水のように出る洗浄水で濯いだのち炭酸ガス、或いは3カペイカでシロップ水をコップに注いで夏の暑い日に飲む楽しみが蘇り、当時の「所謂サービスとは無縁な世界での闘って闘って旅する足掻いた日々」さえ噛締める如く思い出されたのでした。（「プロコ・エアサービス」シニア・アドバイザー）

ロシア連邦共和国紀行 (その5)

服部 文男

『ウドムルト共和国』

ウドムルトの面積は42,100 km²、北海道の約50%の広さで人口157万人、民族構成はロシア人50%強、ウドムルト人は30%強である。首都はイジェフスクで最初に訪れたのは聖ミカエル大聖堂。1823年に建立。1930年スターリン時代に宗教活動停止をしていたが、1997年に再び教会として開かれた。堂々としたレンガ造りの外観に内部のイコン、壁画、装飾がすばらしい。アレキサンダー・ネフスキー・イジェフスク教会は、13世紀スウェーデンやドイツに勝利した英雄アレキサンダー・ネフスキー大公を祭る教会で、スターリン時代は映画館として使用されていた。国立ウドムルト共和国博物館は、19世紀まで続いたウドムルト人の民族衣装や伝統文化の展示物を見学した。博物館入口で民族衣装の5人の女性が民



族楽器を弾いてくれた。見たこともない楽器なので聞くと「К р е з ь」という名前だった。

この地で世界的に有名？となっているものがあるところを訪ねた。その名はM・T・カラシニコフ博物館。自動小銃等の設計者ミハイル・カラシニコフの博物館で、銃の歴史やこれまで製作されたものから現在ものまで展示され、実際に手に触れられるコーナーもあった。この地でなぜ銃が製作されたのかは、この地は鉄が生産されていたとのことであつた。現在もカラシニコフが設計したAK-47などの銃を生産している会社があり、この共和国の重要な産業の一つとなっているようだ。

午後には旅のスタートとなったタタールスタン共和国・カザンのホテルに戻り、帰国の準備となった。

『共和国を巡って』

全ての共和国を廻ってお世話になった1台の車が、帰国の朝もホテルに迎えに来てくれた。有難うの気持ちで乗車したが急に動かない。車体の下を見るとシャフトが折れて落下していた。車も相当疲れたようだ。カザンからモスクワ行きの飛行機の時間もあることからタクシーに飛び乗った。訪れた共和国の皆さんは優しく、あくせくせずに生活しているように思えた。

公園で出会えた人、警察官、博物館や美術館の人、私が挨拶すると誰もが笑顔で対応してくれた。また、ロシアでの交流を願って帰国した。（副会長）

● 広報部宛、ご投稿、ご意見をお待ちしております